

社会福祉法人 佑啓会

佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学舎
〒290-02 市原市今富1110-1
☎0436-36-7611
発行者 里見吉英
編集者 三股金利

北欧視察の旅

(フィンランド編)

スカンジナビア半島のつけ根にスウェーデン・ノルウェー・ロシアと国境を接する国。

サンタクロースやムーミンが代表するように、ほのぼのとしたイメージを持たせる「森と湖の国」も冬は凍てついていた。

人口五百万人、日本の約九割の国土を持つこの国のことは、スキのノルディックやF1など、スポーツの分野以外あまり耳にすることもない。EU関連で旅行前ニュースは見たものの、福祉については、スウェーデンが北欧の代名詞として印象づけられていたからである。

フィンランドでの視察先は、養護学校、授産所、障害者地域福祉センター、リハビリテーションセンター、知的障害者教材センターの五ヶ所であった。

この福祉状況に、スウェーデンとの差異を見つけたのは、視察先での説明であった。

視察といっても国内のほんの数ヶ所にすぎない。一部を見て全体を判断することは不可能である。通訳を介しての説明から紹介する他はない。

スウェーデンの場合、大規模施設から少単位への動きは現実のものとなり、七十三年、二百人以上の入所施設が百三十二ヶ所あったものを、九十年にはたった一ヶ所としてしまった。これに対し、フィンランドは、七十三年当時のまま十二ヶ所ということである。しかし、それが福祉の流れに遅れているかどうかの判断は、そのサ-

ビスを受ける側の考えに左右されるだろう。この国のサービス提供は、いくつかの市町村が連合し、十五のエリアに分かれて実施している。その中の一、南西フィンランド自治体連合の持つバイミオ地域福祉センターに典型と思われる施設を見た。

郊外の丘に立地し、外観は単調だが、ちょうど日本の総合福祉施設の様相であった。建物も比較的にしっかりとし、室内も明るく木の家具も多く、ブラントの緑がいたる所に置かれ、冬の黒々とした木々と対照的であった。

この施設の持つグループホームも、敷地内の職員住宅を利用したもの、分譲住宅を買い上げたところを見ることもできた。ここでは、日本の現状と似ていると感じさせられた。施設でのケアが社会の中で生活する対象者のニーズに合わせて選んでいるという点である。しかしノーマライゼーションの考え方は、七十八年の援護法で、教育・訓練・リハビリのプログラムは、各個人に合わせて作成されるよう規定し、しかも、本人あるいは家族がここに参加できるように定められ実行されている。

フィンランドは同じスカンジナビア半島にあっても民族・言語・政治形態など他の国々と異なる点も多く福祉の形も違う。前述したようにどこか日本的である。

日本と異なる点は、生活共同体のような意識と個人主義、義務と権利の確固とした認識があるように思えた。徴兵さえあるのだ。

また広範な社会保障のために税金が高い、床屋さんでも二十二パーセントの付加価値税がかかる。こうした高負担・高福祉の状況は、九十年からの不況で、福祉対策費

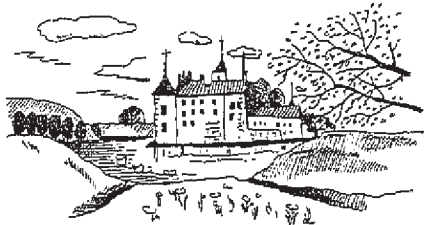
の削減となり、施設でも経済効率を考えた質の向上を求められている。

民間サービスの台頭とそれを活用することによって、施設内の管理部門の人員も退職に追い込まれているとの話もあった。人口の十パーセントの失業者の中に、こうした人達も含まれていたのだ。

我が国でも少子高齢社会の中で高負担の到来はすでに間近である。福祉税の話が一夜にして消える国柄でどう対応していくのか。政治の舞台の問題ではなく、国民一人一人の福祉に対する認識にかかっている。

厳しい自然環境にあるフィンランドであったが、治安もよく外国人に対しても親切な人々。周囲の状況を見ながら、独自の福祉を展開していくであろう。

(指導係長 三股 金利)



はっとするひととき

川 島 米

当日は、好天に恵まれて新年の幕開けにふさわしい、さわやかな朝です。親子三人ですがすがしい気分です。新年会場へと出かけました。門に近づくと、親切に車を誘導していただきました。玄関でも息子がお世話になった先生から親しく声を掛けていただき、うれしく思いました。一人一人を温かく迎えて頂けるといえるのは、施設ならではの良いところだと感じていました。

会場に入りますと、親子三人で出席されている方々が多く、その中に、養護学校在学中役員を共にされた方々の顔触れもあって、久しぶりに懐かしい会話が出来ました。又お父様方の出席がとも多く見受けられました。なかなかこのような交流の機会がありませんからね。

テーブルで一緒にされた方も、「ふれあいホームでお世話になりました。」「袖ヶ浦の施設に入所が出来ました。」「という方もご夫妻での出席。私の息子も、昨年「ヨートステイ」で三週間お世話になりました。

初めての長期間親元を離れて施設での生活です。始めの一週間は私にとって時計の針が止まったままの状態でした。日曜日までさくさく様子を見に出かけました。息子の顔を見るまではとても心配でしたが、息子は、親の心配をよそに元気で寮生との生活に溶け込んでいました。

三週間が終わり、我が家に帰ってきた時の息子は、一回りも二回りも大きく逞しく見え、と

ても涙ぐましく思いました。日頃ご指導される諸先生方に対し深く感謝致します。

そろそろ会場のテーブルは、鮮やかなおせち料理・オードブル・手作りの巻き寿司・豚汁・おしるこなどなど。とても華やかな会場でした。

私の目の前の素晴らしいお料理は、調理師さんと先生方が、お正月休みにも拘らず前日から準備されたとか・・・そのご苦労は並大抵のことではなかったのではと思われます。

クイズ、カラオケ、数名の先生方による生演奏などのプログラム。私は、里見施設長に関する問題で間違ってしまったが、ハンカチセットを頂きました。又、参加した皆さん全員にも景品が贈られました。カラオケが始まると待ってましたとばかりに子供達も仲間に入って、和気あいあいと踊り出したのです。そのリズムの良さに感心してしまいました。

長時間にわたり、盛大な新年会を催されました里見施設長を始め、先生方には心からお礼申し上げます。

これから、数多くの良い出逢いを求めて、楽しい思い出づくりをしたいと思います。

息子共々よろしくお願い致します。

学舎にて一月七日にシヨートステイ、ふれあいホーム、通所を利用している方々を対象に新年会が開かれました。

今回参加されました川島一明さんの保護者の方に原稿を寄せて頂きました。

